

知っておきたい 白虎加人参湯の基本と臨床のポイント

加島 雅之 先生 熊本赤十字病院 総合内科 部長

出典 傷寒論 金匱要略

白虎加人参湯の出典は、『傷寒論』『金匱要略』（いずれも張仲景・3世紀初頭頃）である。

効能又は効果

のどの渇きとほてりのあるもの

古典に見る白虎加人参湯

傷寒論

傷寒論には以下の条文が記されている。

- 桂枝湯を服用した後で、大量に発汗し、激しい口渇があり改善せず、脈が押し寄せるように強く打つ場合は、白虎加人参湯が治療する。
- 傷寒でもし嘔吐や下痢をした後で7～8日目で改善せず、熱が体内に停留し、体表も体内深部もともに熱があり、しばしば軽度の寒気がして、激しく口渇し、舌が乾燥して胸苦しく、数百mLの水を飲みたがる場合は、白虎加人参湯が治療する。
- 傷寒で高熱がなく、口が乾燥しのどが渇き、胸苦しく、背部がわずかに悪寒する場合は、白虎加人参湯が治療する。
- 傷寒で脈が軽く触れるだけで強く感じ、発熱し汗が出ない場合は、体表の病態が改善していない。白虎湯は投与してはいけない。口渇して水を欲しがり、体表の病態がない場合は、白虎加人参湯が治療する。
- もし口渇して水を飲みたがり、口や舌が乾燥している場合は、白虎加人参湯が治療する。

金匱要略

金匱要略には以下の条文が記されている。

- 太陽経に熱が当たったものを、日射病という。汗が出て悪寒して、体に熱を持ち、口渇する。白虎加人参湯が治療する。

- 口渇があり水を飲みたがり、口や舌が乾燥する場合、白虎加人参湯が治療する。

これらの条文から、白虎加人参湯は感染症や熱が存在することで口渇が生じているような、脱水状態を思わせる病態に用いられていたと考えられる。

百方口訣集(津田玄仙 1770年頃)

白虎加人参湯は白虎湯に人参を加味した処方である。白虎湯は、急性感染症の悪寒が消失し高熱が持続する稽留熱(陽明熱/気分熱)に適応があり、四大症状(大熱、大煩渴、大汗、脈洪大)を呈するものに用いる。

白虎湯の症状について『百方口訣集』では、脈長洪数、大熱、大汗、大煩滑、舌白苔が記されている。舌診については、白虎湯は舌白苔だが、厚く黄色くなれば大承気湯など大黃配合処方を使用するというように、舌診で鑑別を行うことが記されている。

外感病の捉え方と治療

急性感染症の捉え方(外感病)

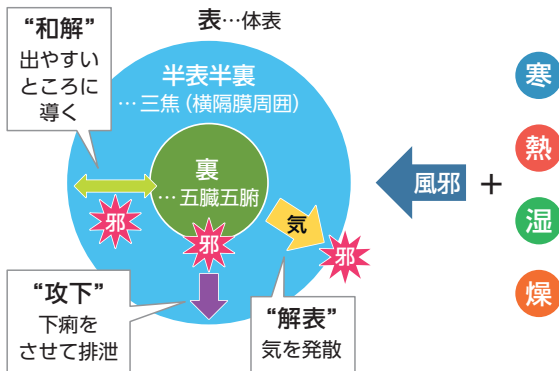
漢方では急性感染症を「外感病」と表現し、風邪と他の邪が侵襲することで現れる病態であると考えている。さらに、感染初期の体表面での病態を表証、邪の侵襲が徐々に進行すると半表半裏証、さらに深部に侵襲すると裏証とステージに分けて考える。各ステージの治療は、表証は気を発散させることで邪を除く“解表”、半表半裏証は邪を出やすいところに導く“和解”、裏証は下痢をさせて邪を排泄する“攻下”である(図1)。

外感病の二大病型 - 傷寒と温病 -

外感病には「傷寒」(風+寒)と「温病」(風+熱)の二大病型があり、さらに細かなステージ分類法がある。

傷寒の弁証は6つのステージ(太陽病・陽明病・少陽病・太陰病・少陰病・厥陰病)に分ける『六経弁証』で考える。白虎湯・白虎加人参湯は「陽明病」に用いる。すなわち、表証から裏証に移り、激しい発熱と寒気が消えて、消化器症

図1 急性感染症の捉え方(外感病)



- 風邪と他の邪が侵襲する病態。
- 表・半表半裏・裏でステージを考える。
- 表証は解表法、半表半裏証は和解法、裏証は邪実であれば攻下法、正虚が主体であれば補法を行う。
- 風+寒：傷寒
- 風+熱：温病
- 傷寒・温病のそれぞれでさらに細かいステージ分類法がある。

《現在の日本では》
邪の種類は論じない。また、感染症のステージングである表・半表半裏・裏を全ての疾患の部位表現に使用する場合がある。表は体表面、半表半裏は肺など、裏は腸管など。

状がない病態に用いると考えられている。

温病の弁証は4つのステージ(衛分証・気分証・営分証・血分証)に分ける『衛気営血弁証』で考える。白虎湯・白虎加人参湯は気分証に用いる。すなわち、熱邪が裏に入りさらに熱化した状態で激しい高熱、大量発汗、口渇の症状があるが、営分証や血分証に至っていない病態に用いる。

漢方における“熱”の分類 - 石膏が有効な熱 -

白虎加人参湯が熱を下げる主な成分は、構成生薬の石膏であると考えられている。

熱の由来による違いを考えると、「気の鬱滞・過剰による熱」「相火の暴走」「邪の性質：熱毒など」があるが、石膏が有効な熱は、気の鬱滞・過剰による熱である。

熱の領域による違いについては、漢方では熱を「気分の熱(気の領域の熱、急性の熱)」と「血分の熱(血に結び付く領域の熱、慢性化した熱)」と考える。色味についても皮膚や粘膜の色が鮮やかな赤味をさしているような場合は気分の熱、黒みがかかり慢性化したような色合いに変わってく

ると血分の熱と考える。石膏が有効な熱は気分の熱である。

また、熱が結びついている物による違いについて、湿と結びつくと「湿熱」、痰と結びつくと「熱痰」、瘀血と結びつくと「瘀熱」に分類する。

白虎加人参湯の病態(図2)

白虎加人参湯の主薬である石膏は、主に肺と胃で過剰に暴発している熱、あるいは皮膚のやや深層で気が停滞したために生じる熱を冷ます処方である。

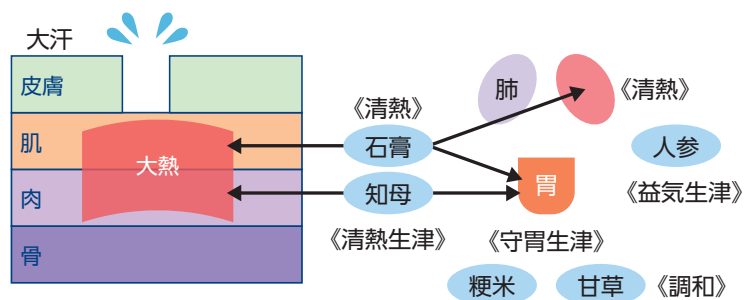
知母は、熱を取り除くだけでなく、津液を主に胃と筋肉で生み出すことができると考えられている。

石膏は消化器系の副作用が懸念されることから、粳米や甘草を加えることで石膏の副作用を抑え、さらに津液を生み出す。

人参が加味されることで気と津液を補い、より熱に伴う脱水の病態に適応する。

図2 白虎加人参湯

- 【組成】 石膏15、知母5、粳米8、甘草2、人参1.5
- 【効能】 清熱生津
- 【主治】 肺胃熱盛・熱厥(陽明気分熱)
- 【症状】 高熱、口渇、発汗、煩躁、脈洪



知っておきたい白虎加人参湯の基本と臨床のポイント

白虎加人参湯の類縁処方との鑑別

黄連解毒湯(図3)

熱毒と湿邪が絡んだ病態で、血分にも影響を与えている状況に用いる処方である。血分の熱毒は、すなわち化膿性病変で暗い発赤、滲出物が軽度ある病態である。

皮膚の乾燥や組織の萎縮などの病態(血虚)が合併している場合は黄連解毒湯に四物湯を合わせた温清飲が適応となる。

越婢加朮湯(図3)

白虎加人参湯と同様に石膏が配合されているが、越婢加朮湯は主に体表面に有効な組成であり、さらに浮腫の改善効果が期待できる処方である。

体表(皮膚・肌)で停滞した津液と、さらに停滞する気の熱化に風邪が絡んでいる病態に用いる。漢方では風が絡むと突然発症、癢痒感があると考えられることから、暑さで誘発され急に出現する蕁麻疹や、関節炎に伴い関節水腫と熱感があるような病態に応用できる。

消風散(図3)

熱毒はあるがやや風の割合が強い病型に用いることから、強い痒み、化膿、鬱滞した気による明るい赤味、陰虚に伴って生じる組織の萎縮や乾燥などが適応となる。消風

散は湿疹性病変の総ての要素に対応することから、病変の中心がどこにあるかを見極めて、他の処方との併用も考える必要がある。また、夜間に増悪し発赤を伴う乾燥傾向のある慢性蕁麻疹にも応用できる。

白虎加人参湯の臨床応用

症例(図4)

● 症例1 16歳 男性、主訴：高体温

8月上旬に屋外での激しい運動後の気分不良で前医に搬入された。熱中症の診断で入院点滴管理が行われたが、体温38℃前後が持続し、アセトアミノフェンを投与しても症状が5日間持続するため、何らかの感染症が疑われて紹介受診した。

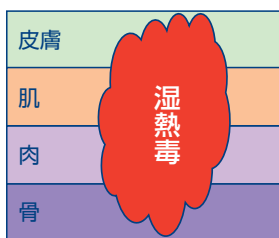
問診では、熱中症後の高体温期が持続していると考えられた。漢方的所見から暑熱の状況が持続していると弁証し、白虎加人参湯を処方した。受診した日の夜から解熱し、翌日には症状は消失した。

● 症例2 42歳 女性、主訴：発赤、癢痒

アトピー性皮膚炎で加療中の患者であり、ステロイド外用剤と荊芥連翹湯で症状は安定していた。しかし、仕事でのストレスがあり、過食・飲酒、痒みに対する掻破で症状

図3 白虎加人参湯の類縁処方との鑑別

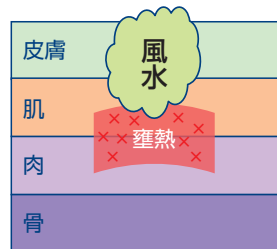
黄連解毒湯



熱毒>湿の全層での血分の病態
血分の熱毒：化膿性病変で、暗い発赤、滲出物は軽度あり

- 全層での血分の熱毒が中心の病態。
- つまり、深さに関わらず、強い化膿性病変と暗赤色の発赤。
- 皮膚の乾燥や組織の萎縮があれば、**温清飲**を使用。

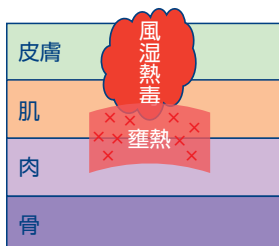
越婢加朮湯



水腫>壅熱>風が皮膚・筋肉に停滞
水腫：浮腫
壅熱：鬱滞した気の熱
風：突然発症、癢痒感

- 皮膚・肌の津液の停滞と圧迫され停滞した気の熱化に風邪も関与。
- つまり、浮腫(膨疹)と明るい発赤、突然発症・消退、癢痒感あり。

消風散



風>熱毒・壅熱>湿>陰虚が皮膚・肌に分布
風：痒み、突然発症・消失
熱毒：化膿
壅熱：鬱滞した気の熱、発赤は明るい
陰虚：乾燥、組織の萎縮

- 湿疹病変に広く対応。発赤・化膿、滲出成分、皮膚乾燥をみて加減が必要。
- 夜間に増悪し発赤を伴い乾燥傾向の皮膚に出現する慢性蕁麻疹。

が増悪した。

漢方的所見から気分と血分の両方に熱がある気血両燔、また津液が消耗していると考え傷津と弁証した。荊芥連翹湯は血の領域の熱に対応するための温清飲をベースとした処方であることから、新たに生じた気の領域の熱と津液の消耗を改善するために白虎加人参湯を追加した。服用の翌日から赤味が引き、痒みも急速に改善した。

臨床報告

● 口渴

加齢に伴う唾液分泌量の低下による口渴や、ドライマウスに対する効果が報告されている。ただし、使用の際には粘膜が紅くなっていることがポイントであり、冷えて萎縮しているような場合は適さない。糖尿病に伴う口渴、薬剤性の口渴に対する効果も報告されているが、強く喉が渇いて実際に飲みたがる、熱感を伴うことが使用のポイントである。

熱中症に伴う口渴、ほてり感については、金匱要略の条文のとおりである。

● 皮膚疾患

アトピー性皮膚炎や酒皰様皮膚炎、蕁麻疹などの皮膚疾患に起因するほてり感にも用いられるが、急性期の明るい赤味を伴う場合が適応になる。さらに患者本人も熱感を伴って口渴がある、あるいは乾燥がみられるときに使用すると効果的である。

白虎加人参湯の要点(図5)

気分熱、すなわち明るい発赤、熱感(通常悪寒なし)で急性感染症もしくは皮膚や粘膜の病態の場合には明るい赤味が特徴である。

また、熱中症などで熱に伴って気や津液が消耗している、すなわち乾燥、脱水、倦怠感が混在している場合、気分の熱と気と津液の消耗がある場合で、特に最も重要なのは気分の熱と言われる状況である。

他の処方との鑑別については、**黄連解毒湯**は暗い発赤、化膿性病変、**温清飲**は暗い発赤、皮膚乾燥、組織の萎縮がポイントである。**消風散**は湿疹性病変の総ての要素に対応するが単独での効果は鈍いため、他の処方との組み合わせを考慮する。**越婢加朮湯**は体表の明るい発赤、浮腫があることがポイントである。

図4 症例

症例1 16歳 男性、主訴：高体温

【現病歴】 8月上旬、屋外での激しい運動を行った後で、気分不良で前医に搬入。熱中症の診断で入院点滴管理を行われた。しかし、入院後も体温38℃前後が持続し、アセトアミノフェンを投与しても解熱せず、症状が5日間持続するため紹介受診。

【既往歴】 特記なし

【漢方的所見】 体がほてる、口渴感あり、倦怠感あり。舌：舌質紅、舌苔薄白。脈：脈滑有力。

【弁証】 暑熱

【処方】 白虎加人参湯

【経過】 受診した日の夜から解熱し、翌日には症状は消失した。

症例2 42歳 女性、主訴：発赤、癢痒

【現病歴】 アトピー性皮膚炎で加療中。ステロイド外用剤と荊芥連翹湯で症状が安定していたが、仕事でのストレスがあり、過食・飲酒、痒みに対する搔破で症状増悪。

【既往歴】 月経困難症

【漢方的所見】 色素沈着があり乾燥している背景皮膚に鈍い発赤あり。搔破痕が四肢に多数あり、その周囲の明るい発赤あり。発赤部位の熱感あり。浸出液や浮腫は認めない。舌：舌質やや紅、舌苔やや黄様。脈：脈滑有力、按じてやや無力。

【弁証】 気血両燔、傷津

【処方】 荊芥連翹湯に白虎加人参湯を追加

【経過】 服用の翌日から赤味が引き、痒みも急速に改善した。

図5 白虎加人参湯の要点

- 気分熱：明るい発赤、熱感(通常悪寒なし)
- 傷気津：乾燥、脱水、倦怠感

≪他の処方との鑑別点≫

- 黄連解毒湯：暗い発赤、化膿性病変
- 温清飲：暗い発赤、皮膚乾燥
- 消風散：湿疹性病変の総ての要素に対応(単独では効果が鈍い)
- 越婢加朮湯：体表の明るい発赤、浮腫